古書販売目録―歴史・利用法・魅力―

講師　石川了氏（大妻女子大学文学部教授）

1. はじめに

私、石川了と申します。はじめにお手許の 3 枚の配布資料の説明をさせてください。

最初の 2 枚の資料には①から⑦までがあって、これは今回の千代田区立千代田図書館での展示ケース①から展示ケース⑦に合わせた説明資料で、各展示ケースの中のものと同内容です。3 枚目がそれぞれの展示ケース番号に対応させた、今日お話しする内容です。お聞きになりながら、適宜ご覧ください。一番最後の「その他」というところは展示と関係がないのですが、せっかくご足労いただいて展示と同じお話でおしまいというのもどうかと思いまして、おまけではございませんが皆様方に関心を持っていただける、何か展示以外の内容もと思って追加したものです。時間があればこれも説明したいと思います。

2. 古書目録コレクションというもの

古書販売目録というのが正式な名称だと思いますが、我々はついつい古書目録と略称しております。

ここ千代田図書館には、昭和 40 年に反町茂雄さんのご遺族から東京都を通じて寄贈されました、ざっと 7000 点を超すという膨大なコレクションがございまして、すでに活用されています。これに加えて最近、九州大学名誉教授の中野三敏先生が集められた、段ボールで 20 箱ほどの古書目録が寄贈されました。いま整理の最中とのことです。今日持ってきましたが、『日本古書通信』平成 19 年 3 月号に、中野先生の「千代田区立図書館の快挙」という題の文章が載っております。副題に「古書店販売目録の収集」とあり、いかにそれが有益であるかということを、2 ページ以上にわたって書いておられます。各店の古書目録をも兼ねています『日本古書通信』は、私も長く定期購読しておりまして、毎号楽しみにしている者の一人です。

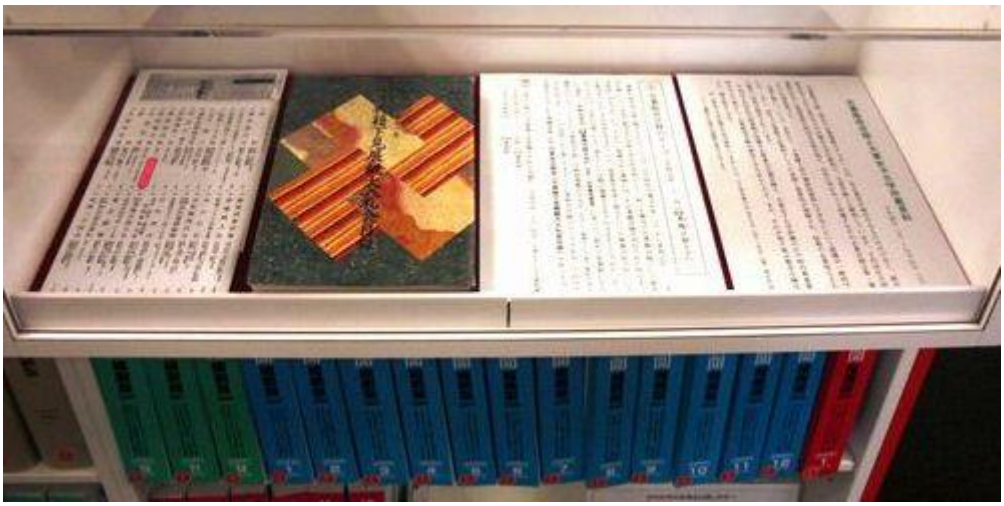
古書販売目録は最近まで個人にしろ図書館にしろ、古書を購入するための補助的な材料であって、古書目録そのものを保存しておくという考え方が希薄だった時代が長く続きました。私は以前から中野先生ともちょくちょくお話をするのですが、かねがね先生は「古書目録はそういうものではなくて、書籍文化の宝庫」とおっしゃっています。私もある戯作者の年譜を作りましたときに、ある先生から段ボールいくつくらいだったでしょうか、かなりの古書目録をお借りしまして、1 ページずつ見ていきましたら、出てくるは出てくるは。その戯作者の識語がある本、書き入れ本、旧蔵本などなど大変有益でした。

古書目録はこれを放っておいてはいけないと、私もここ 30 年ほどのものですがだいぶ保存しておりましたが、家族が邪魔だと嫌がるのです。二度と見もしないのにと勝手に決めつけるのです。そんなことを言われてやむなく、活字本中心の古書目録のいくらかは処分しましたが、それでも和本中心の写真版の多い目録は大事に持っています。とくに必要があるものは本と同じようにして保存しています。

千代田図書館ともご縁があって、連係プレーということで今日お話しさせていただくのですが、あくまでも私のお話は 11 月 27 日に中野三敏先生がこちらで講演をされます、その露払いとしてのお話で、最初の展示ケース①にあるものから順に補足説明のような形でお話をしていきたいと思います。

3. 天和元年（1681 年）刊『新撰書籍目録大全』（江戸・山田喜兵衛板）

それでは、展示ケース①の説明に入ります。



この①は天和元年（1681）に、上方ではなくてこの江戸の地で出版された『新撰書籍（しょじゃく）目録全』（1 冊、江戸・山田喜兵衛板）です。横本の小さな本で本の書名が列挙されている、当時の出版目録のような本です。大妻女子大学も千代田図書館もこの本を所蔵していないので原本をお見せできませんが、この本には、書名を検索しやすいようにイロハ順に並べたり、目次で検索できるようにするとか、いろいろな工夫が凝らされています。一般書物として普通の本同様に購入するお客さんもいたと思うのですが、主な購入者は本屋さんで、客から注文があったときや、自分の店に商品として置いておきたいときに、どこに発注したらよいか知りたい、といったニーズもあったようです。ですから各本の版元まで書いてあるものもあるのです。それらの出版目録を総称して、江戸時代では書籍目録というのですが、その中でこの『新撰書籍目録大全』に初めて、各本にその値段が記載されます。

これが、私が古書販売目録のルーツはこの本だと考える理由です。値段が書いてなければ、通販のカタログになりません。現在では、値段の書いてない販売目録もあるにはあります。入札目録です。これは入札によって値段が決まりますので、事前に目録に値段が書けないのです。本来、一般の古書目録は値段が書いてないと用をなさないので、やはり私はこの本が古書目録のルーツだと思います。「古書」の販売目録という点については後でふれます。

この本は掲載書名をイロハ分けにいたしまして、丁付けで目次を作っています。当時は目次と呼ばずに目録といいました。展示ケースには、本文冒頭部分の写真も出ています。そこには、イロハ順の「イで儒書」ということで『韻鏡（いんきょう）』という儒学書が見えています。これら儒学書の後には「イで和書」の和歌書系、「イの仏書」系と順次書物が並び、「イ」の部が一通り終わりますと、次に「ロ」の部に移るようになっています。ジャンル分けはしてあるのですが現在のジャンルとはかなり違い、当時の分類です。

同じ写真の一番上には、漢数字の一とか二とか四とか六とかいうのがありますが、これが冊数であります。それから書名があって、その作者名が書いてあります。もっとも全作に作者名が書いてあるわけではありません。そして一番下に値段というふうに書いてあります。

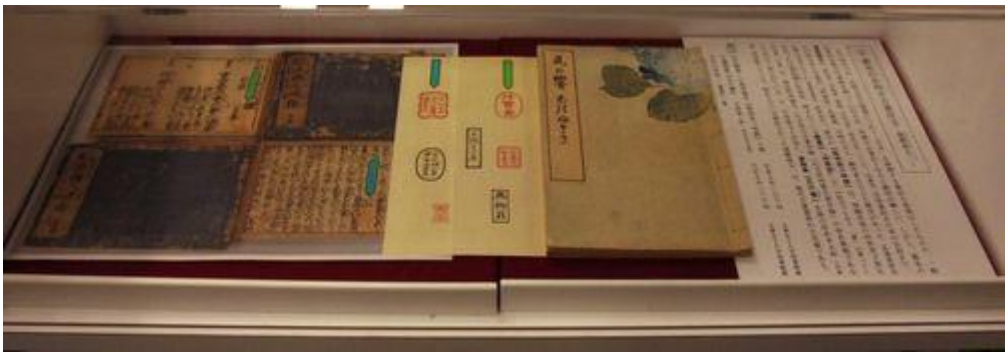
写真の「イで儒書」でいいますと、6 冊の『韻鏡開奩（いんきょうかいれん）』という本は自等庵という人の著作で値段が 4 匁 5 分と書いてあります。この儒書は寛永 4 年に出ていまして、現在のところそれ以外に知られておりません。寛永 4 年は 1627 年です。この書籍目録が刊行された 1681 年の天和元年は、それから 50 数年たっており、とりあえず当時でもこの儒書は古書だったと思います。新刊本もこの書籍目録には入っていますが、古書も混ざっていて値段が付いているということになります。これは古書販売目録の重要な要素で、この書籍目録はそれをきちんと備えているわけです。同じような書籍目録でもう少し後の元禄 9 年（西鶴没後 3 年目の 1696）版には、西鶴の天和 2 年（1682）に出た『好色一代男』が収録されており、これも 10 数年前に出た本を載せているわけです。この浮世草子は大本 8 冊と分量が多いものですから、少し高い 5 匁という値段が付いています。今の値段に直しますと 1 両が 10 万円として、先に述べました『韻鏡開奩』の 4 匁 5 分は約 7500 円ほど、西鶴の 5 匁は約 8300 円くらいになります。

当時の貨幣価値は今と比較するのが大変難しいのですが、基本的には米 1 石が小判 1 両であります。1 石は 10 斗です。1 斗は 10 升、1 升は 10 合ですから、これから計算して、現在の標準的な米の価格と比較して算出します。江戸表は貨幣の金貨中心なのですが、大坂では銀の重さで量ります。銀の重さ 60 匁が小判 1 両、これを銭になおしますと 4 貫文（4000 文）に相当します。ここでは計算しやすいように 1 両 10 万円で換算してみましたが、もう少し厳しくみて 1 両 8 万円とすれば、銭形平次は毎回 20 円玉を投げていた計算になります。当然後で拾い集めていたに相違ありません。

少し脇道にそれましたが、以上のような次第で私はこの天和元年の『新撰書籍目録大全』が古書販売目録のルーツだと考えています。これ以前にも書籍目録はありますが、それらには古書販売目録としての重要要素の何かが必ず欠けているのです。

4. 達磨屋五一について

さて次に、展示ケース②の達磨屋五一に移りたいと思います。



1 枚目の方の資料に書きましたが、特に江戸時代の本屋さんというのは、新刊本も古本も扱いました。したがいまして古本屋さんということに限定することは、実は大変難しいのですが、この達磨屋五一はまぎれもない古本屋です。

達磨屋五一（文化 14 年～明治元年〈1817～68〉）の略伝からお話しします。町人で姓は岩本、別号を花廼屋蛙麿、法斉、無物翁などとも称した五一には、『瓦の響　しのぶぐさ』（大妻女子大学蔵）という本があります。これは達磨屋五一の遺稿集で、その孫に当たる占春堂（俳諧研究家の岩本梓石こと岩本米太郎）が祖父 50 回忌の大正 6 年（1917）に私家版で出版したものです。「瓦の響」と「しのぶぐさ」の 2 部構成になっていまして、「瓦の響」は幕末期の諸書に収まる五一の文章を集めたもので、よく知られた文章も少なくありませんが、「しのぶぐさ」は興味深い内容で、孫が祖父の略伝を大変面白く書いています。それを読んでいきますと達磨屋五一がまぎれもない古本屋であったことがわかります。彼は江戸日本橋四日市に「珍書屋」という古本屋を開いています。この人は大変な本の目利きだった人で、仮名垣魯文や二世柳亭種彦といった戯作者や、蔵書家の関根只誠などが盛んに出入りしていたことも出てまいります。

達磨屋という通称はどこから来たかといいますと、五一がまだ芝切通しで露天商をしていた頃、知人から、かつて栃木の旧家で今は芝中門前で玩具の達磨をひさぐ父と娘一人の家への入夫を薦められます。もと旧家ならそれなりに資産もあろうとの欲心も手伝って婿養子に入るのですが、話が全然違っていたため一旦はその家を出ようとします。しかし考え直して、入夫ではなくこの親子を引き取って浜松町に居を構えました。これを機に、友達からは達磨屋、達磨屋とあだ名で呼ばれたのだそうです。五一の残した狂歌「七転びしても五一は碌じゃもの達磨やなればきつとおきやがる」からしますと、彼は達磨屋という呼ばれ方をよい風に受け取っていたことがわかります。「碌じゃもの」とは碌でもないという意味の逆ですね。「おきやがる」は起き上がるの江戸っ子なまりでしょう。

ところで、近世の古本屋は、京都では寛文 11 年（1671）に「古本屋勝兵衛尉」という人が本を出版しております。この人物はわざわざ古本屋と銘打っていますから古本屋だったんだろうと思うのですが、今のところこれ以外の詳細は不明です。

大坂では延宝 7 年（1679）、この年は西鶴が『好色一代男』を書く数年前ですが、この年に出版された『難波雀』、これは大坂の地誌つまりタウンガイドのようなものですが、これにどういうところに本屋さんがあるかということが書いてあります。これによりますと、本屋のなかでも古本屋は心斎橋すじと書いてあります。このあたりは今では繁華街ですが、当時は古本屋が多かったことになります。

しかし江戸表の古本屋はよく分かりません。あるにはあったのですが、その歴史からいいますと、江戸表の古本屋というのはもともとは露天商で、それも骨董屋さんがついでに本も持っていって露店で並べて売っていたようです。その歴史が長かったのです。大田南畝や山東京伝、柳亭種彦などは、筋違橋から浅草橋へと続く柳原の露天商で古本を手に入れたことを書き記しています。こういう古本屋の歴史があるのですが、ともかくも関西を含めて最も目利きの古本屋として著名なのは、江戸幕末期の達磨屋五一でしょう。とくに五一の集めた本に押された「待賈堂」の蔵書印は、かの反町茂雄さんが自店の古書目録を「弘文荘待賈古書目」と命名した典拠としても有名です。

展示ケース②にはもうひとつ、江島其磧の浮世草子の代表作『風流曲三味線』（6 冊、宝永 3 年〈1706〉刊。大妻女子大学蔵）を展示しておきました。達磨屋五一の旧蔵書で、「待賈堂」と「江戸四日市／古今珍書儈／達摩（ママ）屋五一」という朱印が押してあります。江島其磧は浮世草子や歌舞伎評判記の作者として知られ、京都の八文字屋八左衛門という本屋のゴーストライターでした。浮世草子の三味線物や気質物を作り出したのはこの人で、書名の上からしますと坪内逍遙の小説『当世書生気質』も気質物の一作です。

5. 古書販売目録の元年

展示ケース③には、古書目録元年ということで明治 23 年（1890）の下記 2 点を展示しました。古書目録のルーツは先程申しました天和元年になりますが、古書目録そのものがいつから出され始めたかといいますと、現存する最も古いものは、東京の雁金屋青山清吉という書店の『青山堂現収書目』第 2 号と、大阪の松雲堂鹿田静七の『書籍月報』第 1 号です。2 点ともすでに反町さんが『紙魚の昔がたり　明治大正篇』（八木書店、平成 2 年）で紹介されていまして、現在はともにここ千代田区立図書館の所蔵です。

大阪の松雲堂から述べますと、水谷不倒という人が『明治大正古書価の研究』（駿南社、昭和 8 年）という本を出しておりまして、その中で松雲堂の古書目録のおかげでこれが書けたとるる述べています。鹿田静七は関西きっての古書店主で、古書目録作成の先達だったことになります。不倒のこの著作は後に『古書の研究』と改題され、今では『水谷不倒著作集』第 6 巻（中央公論社、昭和 50 年）に入っていて容易に見ることができます。古本、とくに近世の和本の値段がどういう風に移り変わっていったかを知るのに大変重宝な、またある意味では大変特異な分野の名著です。もしも不倒に続く『新・古書価の研究』が出るとしたら、後日ここで講演される中野三敏先生以外に書ける人はいないでしょう。なお、松雲堂鹿田静七については、大阪の古書店中尾松泉堂のご主人の中尾堅一郎さんが岩波の雑誌『文学』の昭和 56 年 12 月号にその代々について書いています。ここにいう静七はもともとは貸本屋だった人で、その二代目です。父親つまり初代は大塩平八郎などとも交流がありました。

もう一方の東京の青山堂雁金屋清吉は、江戸時代から続いている本屋さんです。初め山城屋佐兵衛や英屋文三といった本屋に丁稚奉公に入り、そこで修行してやがて貸本屋に転じ、それから青山堂雁金屋を継いだ人物で、おそらくは二代目の清吉だろうと思います。この雁金屋一族の先祖は井上隆明氏『近世書林版元総覧』によりますと、享保 19 年（1734）創業の雁義堂雁金屋儀助という本屋で、その三代目から清吉を名乗ったそうです。初代清吉は狂名を青山堂琵琶丸といい、平々山人とも号して大田南畝などとも親交があり、南畝も『放歌集』という歌稿の本に「平々山人伝」という一文を書いています。

この東京と大阪の店主二人が揃って明治 23 年、古書販売目録を出したわけです。『青山堂現収書目』は月ごとに出ていまして、反町さんのコレクションには第 2 号からが揃っています。第 2 号が同年 2 月に出ていますので、第 1 号はたぶん 1 月に出たのだろうと思います。それにやや遅れて大阪の松雲堂が同年 5 月に『書籍月報』を出すわけですが、この古書販売目録は国会図書館に第 2 号から入っており、当初私などはそこにしかないと思っていましたら、こちらの千代田区立図書館に伺ったら第 1 号があって驚いた次第です。

このように相次いで古書目録が出た背景については、私の同僚から聞いたところでは、東京帝国大学に全国初の国文学科ができたのが前年の明治 22 年のことだそうで、私など日本文学をやっている者などはこの印象が強くて、これがきっかけと思ったほどです。しかし先ほどの反町さんはさすが古書業界の第一人者ですね、明治 22 年 7 月に東海道線が全線開通して本を輸送する手段が出来たので、それで古書販売目録が生まれたのだと指摘しています。したがって東海道線の開通以前に古書目録はあり得ないというのが反町さんの考えです。いかにも本を扱うプロらしい見解で、そう言われればそうだろうなと私も思います。いずれにしましてもこの明治 23 年という年は初めて古書目録が作られた年で、これは古書業界の営業近代化の大変革だったと理解してよいと思います。

6. 江戸通だった愛書家の旧蔵本

4 番目の展示ケースには、林若樹（昭和 13 年 64 歳没）という人の旧蔵書を入れました。

森銑三氏は『林若樹集』（青裳堂書店、昭和 58 年）の跋文で、三田村鳶魚と三村竹清、林若樹を戦前の江戸通と呼び、中でも若樹が他の二人より一段高い存在と記しています。また反町さんの『一古書肆の思い出 2 』（平凡社、昭和 62 年）のなかに、「善本蒐集は有利な貯蓄－林若樹文庫」の一文があり、著名な愛書家だったことも分かります。

展示した『若樹文庫入札略目録』（昭和 13 年 9 月、千代田図書館蔵）は、今述べた『林若樹集』にも収録されていて私も知っておりましたが、その略目録の原本を実際に手にとって見たのは今回が初めてです。一緒に展示しました唐衣橘洲撰『狂歌若葉集』（2 冊、天明 3 年〈1783〉刊。大妻女子大学蔵）は、この略目録の 172 番に『狂歌猿の腰かけ』と『卯雲今日歌集』の 3 点セットで出ています。『狂歌若葉集』は調べますとあちこちの図書館に所蔵されており、決して珍しい本ではないのですが、それらはすべて本の大きさが縦 22、3 ㎝ほどの半紙本です。対して本学名誉教授だった浜田義一郎先生旧蔵の展示本には、「若樹文庫」という朱の蔵書印があるだけでなく、そのサイズが半紙本より一回り以上も大きい、美濃紙を半分に折った大本サイズの特製本なのです。大本の『狂歌若葉集』など、私は展示本以外に見たことも聞いたこともございません。それで今回展示させていただいたのですが、さすが林若樹が持っていた本だと思います。

展示した略目録は反町さんの旧蔵書で、『狂歌若葉集』のところには「8 円」という反町さんの書き込みがあります。昭和 13 年当時の 8 円がどのくらいの価値だったのかは、私がまだ母親のお腹の中にもいなかった時期ですから見当がつきかねます。こんなとき私がちょくちょく参照するのが、毎日新聞社から出版された『値段の　明治・大正・昭和　風俗史』という 4 冊本で、これを見ますと、昭和 12 年のオーダーメイドのワイシャツが 1 着 5 円と出ています。この狂歌本はそれより 3 円も高く

て 1．5 倍以上もするのですから、普通一般の人ならまず買わないと思います。

ついでですから略目録の 3 点セットの他の 2 書にもふれておきますと、ともに稀覯本です。幕臣だった木室卯雲の家集『今日歌集』、これでキョウカシュウ（狂歌集の意）と読むのですが、この若樹旧蔵本も大妻女子大学が所蔵しております。残る『狂歌猿の腰かけ』は九州大学文学部と聖心女子大学図書館の本を一見しましたが、いずれも若樹の旧蔵本ではありません。

7．寛永寺での入札下見からの掘り出し物

今度は 5 番目の展示ケースのお話です。曽呂利新左衛門は豊臣秀吉の御伽衆としてよく知られていますが、この曽呂利に仮託された話を集めた作が『曽呂利物語』という本です。

近世における怪異小説の流れには、作者未詳の『曽呂利物語』を源流とします日本の伝承文学系統のものと、浅井了意の『御伽婢子』（おとぎぼうこ。寛文 6 年〈1666〉刊）を源流とします中国譚翻案もの、この 2 つの系統があります。この 2 系統を代表する両作には実は同じ素材源の話があるのですが、残念なことに『曽呂利物語』には刊記のある本がなくて、どちらが先行作なのか長く研究者を悩ませてきました。

ところが、展示した昭和 34 年の東京古典会『古典籍展観目録』（千代田区立図書館蔵）の 271 番に、寛文 3 年（1663）8 月の刊記がある 5 冊本の『曽呂利物語』が出たのです。このころは業界にまだまだ大変珍しい本がいろいろ出回っていましたから、その価値がまだ理解されていなかったのかもしれませんが、写真掲載もされておりません。またその目録が上野寛永寺での入札会下見用でしたから、実際に原本を手にとってご覧になったかたもけっして多くなかったと思います。それでも以後、『御伽婢子』より『曽呂利物語』のほうが先だということになっていくのですが、その根拠は実をいえば原本確認というよりも、多くの場合はそのときのこの入札目録に依拠していた、もっと厳密にいえば、この入札目録の所蔵者がわからなくてこれにすらあたり直すことが叶わず、その伝聞に頼っていた可能性すらあるのです。

その 33 年後、平成 4 年の東京古典会『古典籍下見展観大入札会目録』299 番に再び寛文 3 年 8 月の刊記がある『曽呂利物語』が出ました。これは私も原本を見ておりまして、結果的に大妻女子大学が落札してその所蔵となりました。もっとも、昭和 34 年の入札会の目録にあった本が巡り巡って再び出品されたのかといいますと、実はそうではありません。昭和 34 年の本の題簽（だいせん：表紙に添付されている、書名が記された紙片）がその入札目録では、版木で摺った「原題簽」と書いてあります。ところが私どもが落札しましたものは手で書いた「書き題簽」でした。そういうことで同じ本ではないことが判明する次第です。

今年平成 21 年 3 月に出版されました『仮名草子集成』第 45 巻に収録されていますのは、この大妻女子大学本を底本とする翻刻で、刊記部分の写真も添付されています。刊記のある本の本文が初めて公刊されたわけでして、ここにようやく昭和 34 年の入札目録もひとまずの役目を終えたことになります。

8. 西鶴にあやかった珍本の履歴書

次は展示ケース⑥の『好色三代男』のお話です。この本が出品された古書目録は、反町さんの立派な図録『弘文荘敬愛書図録』（昭和 57 年）で、それを縮小コピーして展示しました。図録そのものを展示したかったのですが、大きすぎて展示ケースに入らないのであきらめました。

原本展示した『好色三代男』（5 冊、貞享 3 年〈1686〉刊。大妻女子大学蔵）は、西鶴の『好色一代男』と『諸艶大鑑（副題「好色二代男」）』を意識して書かれた作品で、作者は大坂の西鶴ではなく、そのライバルだった京都の西村市郎右衛門未達です。一代男の主人公は世の介ですが、三代男は夢助という主人公です。西鶴の好色一代男では、この名前は世の介の父親の名前になっています。この主人公が小川に浮かぶ盃に乗ってとある庵室にたどり着き、そこでの障子の向こうに見たさまざまな好色世界を綴った作品ですが、井戸に落ちて好色地獄という地獄に入り込み、伊豆箱根の岩穴から生還してくるというような異国巡り的な一面もあります。西鶴が主として遊女との好色世界を描いたのに対し、未達が素人女性に注目しようとしている点に特色がありますが、一口でいえば流行作家だった西鶴を利用した追随作と呼べるでしょう。

この本を取り上げましたのはこれが稀覯本だからではなく、それもありますが反町さんの立派な古書目録には、旧蔵者の蔵書印のことがまったく書かれていなかったからです。原本を見ますと片仮名の「アカキ」という蔵書印と、「月明荘」という蔵書印の 2 つが押してあります。月明荘は反町さんの印ですね。アカキというのは横山重さんという人の印で、愛知の犬山にお住まいで晩年は伊豆に隠居された大変な蔵書家であります。

もともとは大変珍しい本なので大妻女子大学で購入してもらったのですが、その後『西村本小説全集』という本のなかに活字化しようという企画が持ち上がり、この三代男の翻刻を私が担当することになりました。ひとまずは吉田幸一先生の古典文庫第 166 冊目の写真版で原稿を起こしながら、大妻本と対校いていきました。そうしましたところ、その写真版には変な所に句読点の黒丸があるのです。大妻本を見ますと、そんな句読点などないのです。おかしいなと思って両者をひねくりまわしているうちに、写真版の黒丸が大妻本の虫穴だということに気づきました。和本の写真撮影をしますと虫穴

はライトのかげんで影ができて黒く映り、それが句読点の黒丸と見間違えるのですね。原本の虫穴と写真の黒丸の位置がことごとく一致するのですから、大妻本はかつて吉田幸一先生が所蔵しておられ、それを古典文庫の底本に利用された後に手放され、それをさらに弘文荘から大妻が購入したということになります。一字一句丹念に比較をしていくうちに、蔵書印からではまったく分からない旧蔵者が判明した一例です。もっとも旧蔵お三方の所蔵順序は別問題で、私もそこまでは調べておりません。

これから私が申し上げますことは、翻刻本出版後に生前の吉田幸一先生が私に直接お話しくださった内容に基づきます。後でそうだったのかと思えばその通りなのですが、最初はまったく気づかなかったことがらです。古典文庫写真版の各冊表紙をよくよく見ますと、比較的保存状態のよい後表紙を前表紙に利用したり、題簽を新たに作成した痕跡がございます。詳細までは申し上げませんが吉田先生も率直にお話しくださったように、一昔前まではこうした行為は暗黙の了解事項の範疇だったと私は思っています。

その本がたどった所有者の変遷、つまりその本の履歴書は普通は押されている蔵書印でたどっていくのですが、それがなくても失われていた履歴が判明した一例をご紹介しました。

9. 絵草紙における校正作業

ついで展示ケース⑦の説明です。ここの展示は明治に入ってからの絵草紙（合巻）で、展示品は、二世柳亭種彦作、守川周重画の絵草子合巻『白縫物語』第 64 篇の校正摺り 1 冊と、その商品としての完成本（1 冊、明治 12 年〈1879〉頃刊）、並びにこの校正摺りが掲載された古書目録『青裳堂古書目録』（平成 4 年）の 3 点で、いずれも大妻女子大学所蔵です。

校正の朱が入った馬琴の読本などは天理図書館などに所蔵されていてよく知られていますが、合巻のような女性や子供を読者対象とする絵草紙、草双紙の校正は、その作業工程は同じであっても、作業の視点が本格的な小説で立派な本である読本とはちょっと違うようです。

作者が原稿を書きましてそれが彫り師、刷り師に回りまして、まず最初に一回摺られます。その摺ったものが著者のところに送られてくるわけで、これがいわいる初校摺りですね。これに著者が朱の筆で、ここを直せあそこを直せと指示を書き入れ、彫り師に戻します。そうしますと彫り師は入木（いれき）という技法を使って指示通りに文字や表記を直します。

再校用は現在とちょっと違っておりまして、訂正した部分のみを摺って切り取り、現在の付箋の要領で初稿本の朱筆箇所に添付し（この作業を「貼り込み」と呼んでいたように思います）、再校用の

本として著者に返します。展示しました校正本はこの段階のもので、初稿本のあちこちに付箋のようなひらひらとした貼り込みがあり、それをはねあげますと、その下に初稿の朱筆書きがある、ということになります。

ここでご関心を持っていただきたいのは、展示した再校本は多くの付箋がある初校摺りなのですから、一番最初に摺ったものということで摺り上がった摺刷面がきわめてきれいな美本だということです。原則的には、これ以上に摺りのよい本はないということになります。

それから興味深いのは、その付箋とその下の朱筆を見比べますと、濁点を補う指示が目立つことです。その理由は、女性と子供が読む本文の大半が平仮名書きの本ですから、著者としては意味が通じやすくて誤読されにくい本文にしたいからに他なりません。古典の世界では濁点を打ったり打たなかったりしますが、それはそれなりの教養がある大人向けならそれでもいいでしょうけれども、女性や少年向けの平仮名中心の本文に濁点がないと、意味が理解しにくいのです。合巻作者はそれを実によく知っているのです。

今回、この校正作業をどう展示したらご理解いただけるかいろいろ考えまして、付箋を下ろしたままの複写物と、付箋がはがれないように細心の注意を払いながら、付箋を少し折り曲げて下の朱筆が見える状態にして透明ケースに入れて複写した物、この２種の複写物を用意しました。よく見ますと、付箋そのものに朱が入っているところがあります。初校段階での直しではまだ気に入らなかった部分だったのだろうと思います。その結果どうなったかは、今回の展示でその隣に商品としての完成本を並べておきましたからご覧ください。なお、展示した完成本は後印のきわめて摺りの悪い本です。すでに述べましたように、摺刷面が大変きれいな美本の校正本は髪の毛なども一本一本がきれいに見えているのですが、完成本は版木が摩耗しており、頭髪には墨垢が溜まって全体が真っ黒なベタのようになっているのも分かります。もっともそれだけ多くの回数摺られた、つまりそれほどよく売れた本、ということの証でもあるのですが。

10. 古書目録と私

①から⑦の展示ケースについて、ざっと補足説明をさせていただきましたが、ここで古書目録の利用法とか面白さとかいったようなことをちょっとお話したいと思います。

古書目録は普通に考えれば、自分のほしい本がないかなと思って読む、これが一般的な利用法でしょう。問題はほしい本に関する入手したい基準だろうと思います。今日はたまたま八木書店さんの一番新しい古書目録が私の机上にありましたので、それを持ってまいりました。古書目録には書名が書いてあって、その巻冊数や著者名が記されていて、刊年が書いてあって版元名があって、値段が書いてある、またその本に関する特色・特徴、そういった諸要素が盛り込まれています。このことは和本・和装本の場合に限らず、普通の活字本の場合でも基本的にはそういう要素が記入されているわけです。これをぺらぺらと眺めながら自分の気に入った本はないかなと探すわけですが、実はこれが多様で、書名や著者ばかりにこだわってはいる訳ではありません。

たとえば明治期にどんな本が出ているかを徹底的に調べている人は著者だとか分野なんかは関係ありません。刊年ばかり見るのです。そういう探し方をして目録を利用している方もいらっしゃいます。私でいいますと、しばらく前までは金港堂という本屋が気になって気になってしかたがありませんでした。この本屋が明治半ばに出版したものに、江戸戯作を中心とする『小説史稿』という本があ

ります。著者の関根正直は有職故実方面で著名で、その系統の本は大変高額な値段がついています。しかしこの人は達磨屋五一のところでふれました関根只誠の息子で、その関係で『小説史稿』だけでなく、国文学方面の『随筆雑話　からすかご』といった隠れた名著もある人です。

金港堂は『小説史稿』のような江戸文学系の研究書を出したかと思うと、海外系の全然違う分野の本も出しています。私の個人的な趣味から言うと金港は非常に気になる本屋さんです。ですから古書目録を見ていて金港堂が出てきますと、まず値段を見てこれなら買おうとか、この分野でこの値段では合わないとかいう買い方をします。

古書目録に載っているこうした個別要素の単位でいえば、『風流曲三味線』や『好色三代男』でふれました蔵書印にこだわる人もいます。それなりの人の蔵書印が押してあれば、当然本の値段も跳ね上がります。世間ではそれほど知られていなくても、自分にとってはゆかりや親しみがある人の蔵書印が押してある本を見つけますと、やはりほしくなります。本の中身がどうこうでなく、その蔵書印が押してある、つまりその人が手にしていた本だからほしいという感覚ですね。その場合、蔵書印の実物見本が目的なら問題ないのですが、旧蔵者という意味では注意せねばならないことがあります。それは、旧蔵者没後に出版された本にその人の蔵書印が押されている場合があることです。何らかの縁でその蔵書印を入手した人物が、他意を持って勝手に押すからです。式亭三馬旧蔵本にはこのケースがあるそうで、実は私もこれで失敗したことがあります。

それから、ちょっとこれは古書店の方には申し訳ない話かもしれませんが、私の勤務先研究室や自宅には、東京古典会の入札下見展観目録が合わせて何冊も送られてきます。これを私は大学院の書誌学授業のテキストとして配布、利用しています。多方面にわたるさまざまな分野の写真掲載、それも特徴的な部分の掲載が多く、これほど有益なテキストはありません。それも教材費はタダです。しかも毎年内容が異なるその年度版が出るのですから、学部とちがって少人数の大学院授業にはうってつけで、毎年異なった内容の授業ができます。

このお話をお聞きになって、あそこの大学や石川には、今後は 1 冊限りしか送付しないなどとはおっしゃらずに、是非とも大目に見ていただき多めにお送りください。

古書目録が面白いということでは、エエッこんな本があるのか、と気づかされることが何よりも嬉しいですね。たとえば『明治事物起源』を書いた石井研堂という大変博学な人がいます。あまりにあちこちに書くので、研堂の著作物はどれほどあるのかはかりしれないと思っていました。ところが研堂には著述年表のようなものがあるのです。たった一人のお弟子さんが当人の許可をもらって、研堂自身が筆をいれた著述目録が出ているのです。古書目録のなかで初めて気づいたときにはびっくりしました。研堂がどこに何を書いているのか関心はあったのですが、そういうものがあるということを私はまったく知らなかったのです。

もう少し真面目な話をしますと、私は和本、和装本という書誌学用語は知っていましたが、古書目録を見るまで線装本という言葉を知りませんでした。江戸時代までは和本、明治に入ってからのああいう糸綴じの本のことを和装本と呼ぶんだと勝手に思い込んでおりました。ところが東京に就職しまして古書目録を見るようになってから、線装本と書いてあるものがあるのに気づきました。初めは線装本ってどういうことかなと思いました。当然、中国から朝鮮半島を経てきているわけですから、我々が和本、和本というのは中国の人たちからみれば、何を変なことを言っているのか、線装本という言い方が東アジアのレベルからみれば正しいのだろうとやがて理解しました。私たちだけが勝手に和本といっているだけなのでしょうね。食用ガエルが自分の名前を知ったら怒るだろうという話を読んだ

ことがありますが、それと同じような話かもしれません。そんなことも古書目録を見ていて感じました。

11. 古書目録の収集の意義

今までお話してきましたことは、いずれも古書目録の意義の一端にどこかでつながっているつもりでおりますが、ともかくも古書目録が書籍文化の宝庫であることは、中野三敏先生が指摘されるように間違いのないところであります。今や、古書目録を古書購入の補助材料として利用してそれを購入できたらもう用済み、という単純活用の時代ではありません。

ここ千代田図書館は反町さんが集められた、昭和 40 年までの古書目録 7000 点余を所蔵され、続いて中野先生からは 20 箱もの古書目録―想像しますに昭和半ば頃以降のものを主として、それ以前のものも少なからず混在していると思います―が寄贈されました。両者を併せ持つことになりました千代田図書館は、昭和 23 年以来の古書目録をほぼ網羅する、まさに「書籍文化の宝庫」の宝庫であります。

そろそろ時間もきましたので、最後に、私は中野先生ご寄贈古書目録のデータベース完成を心待ちにしている一人でありますことを申し添え、終わりにしたいと存じます。長々とご静聴ありがとうございました。

講師プロフィール

近世中・後期の江戸戯作を中心に研究していますが、現在は知と戯の文芸である江戸狂歌と、その作者及び江戸狂歌壇の動向に夢中です。また和本（線装本）を見るのが大好きで、どんな虫喰い本であっても、つい手にとってしまいます。近世の作家で好き嫌いのレベルでいえば、日本のシェークスピアといわれる近松門左衛門の生き様にあこがれています。私にはできない生き方だからです。

【主な著書・論文】

『八文字屋本全集』（共編。汲古書院、全 23 巻。平 12 完結）

『江戸狂歌本選集』（共編。東京堂出版、全 15 巻。平 19 完結）

「「天明狂歌」名義考」（「大妻国文」平 17・3）

「川柳・狂歌」（『日本語日本文学の新たな視座』、おうふう刊。平 18）

『嬉遊笑覧』（共編。岩波文庫、全 5 冊。平 21 年完結）

（大妻女子大学 HP より抜粋）

演題：ミニ展示「古書販売目録と大妻女子大学所蔵資料」関連講演会
「古書販売目録－歴史・利用法・魅力－」
講師：石川了氏（大妻女子大学文学部教授）
日時：2009 年 11 月 6 日（金）19：00～20：30
会場：千代田図書館 9 階　第 1・2 研修室
主催：千代田区立千代田図書館
共催：大妻女子大学国文学会